

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	わかき帝國と靈的活動：論説
Author(s)	内田，虎六郎
Citation	龍南會雜誌， 1 0 6： 9 - 1 7
Issue date	1904-05-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5688">http://hdl.handle.net/2298/5688</a>
Right	

# わかき帝國と靈的活動

内 田 虎 六 郎

論

幽なる彩霞に、美はしき花輪に、夢こもるわかき草に、今や新らしき生命は湧きかへりぬ。見よ夜天の宿に輝く星華、如何に美妙の薄光をたぐへて、天なる愛をさぐやぐぞや。靈の胸、遠く雲路を横ぎつて、翱翔大自在の活動を現する、それ今の時か。天と地との間に横る秘密の鎖鑰、未だこれを執るにたへたる人傑を見ず。人類の魂魄を誘うて彩華と光明とに導かんとせしもの、これをユダヤと印度とに見たりといへども、末世の經典こゝに痴と邪と醜との手に握られては、そは却りて民衆を驅けつて大寒焦熱の巷に彷徨せしめんのみ。あゝ速に立つて靈の活動を宣言するものは誰ぞ。

## 二

夫れたた劍のみを把つて戦ふもの、これをしも勇と云ひ得べくんば、行いて南方椰子の葉のしげれるところ、黒鐵の皮膚を有する蠻族に見よ。彼れ等が家に飾られたる髑髏數千、あゝこれ渴仰威敬に價するものに非ずや。されども詩人は『黒龍江上の悲劇』を歌つて弱者の靈を吊ひ、博愛の涙かわきあへざる人はキシネツフの虐殺をさぐて天なる神にかの國の暴虐を訴へつゝあるにあらずや。英杜戦争を見て誰か英國の勝利を讃するものぞ。彈藥と蒸氣との應用は、これ戦争をして意義あらしむるものにあらず。さらば汝の痴を去れ、さらば汝の愚を拂へ。あゝ吾人をして北狄南夷たしら

めざるよりは、何くんぞよく意義なき劔と銃と艦との戦に満足するを得んや。

蒼穹のあなた、巨人高らかに叫んで曰く、汝何ぞ光明を見ざると。然り、吾人は劍の外にある者を求めざるべからず、光明は果していづくにありや。

民をして徒らにわか草の野に酔はしめむは、これ吾人の理想にあらず。活動は人類生存の第一義なるべければなり。しかも亦、屈原の『離騷』一篇、終に何等の權威をか價せむ。七寶の門と殿堂と、彩虹の影に立ちたるイリスの女神と、曉天のオーロラの姿とを仰がむは、正にこれ又吾人生存の第一義なるべきに非ずや。酔うたるものをして酔はしめよ、悲むものをして悲ましめよと、嗚呼これ吾人のたへ得るところに非ざるなり。酔うたるものを見よ、そこに何等の意義がある。悲むものを見よ、そこに何等の光明がある。かくて黙々たらむは、神を忘れ、自己の心霊のうつくしくき温き響動をきく得ざるものにあらずや。さらばいち早く神の聲に聞け、而して汝自らの聲にきけ涙交ふる憧憬の情を歌ひつゝも、ここに勇ましく汝の兜に白百合をかざさぬは、これ誠に其の聲の教ふるところに非ざるか。

嗚呼徒らに酔ふるものよ。眠れるものは天國にあらず、動かざるものは理想境にあらずなり。常に活き、常に動き、かくて愛と光とを見出すもの、これ吾人が夢想すべきものたらむなり。カーライルは默示の靈火によつてうが胸深く無限の力を得たる時、呼んで曰く。

Ich bin ein Mensch geboren

Und das mußt ein Kämpfer seyn.

と、あゝかゝて彼は奮勵健闘するところに征服の牌腕を興へ、遂に『さらば死をして來らしめよ』と叫び、『再び降伏せざるべし』と決したるにあらすや。げに墮眠と天國とを混じて向上の路を知らざるものは憐むべきかな。

往昔ツールの戰は慘狀を極めきといへども、見よ、敗れたる回々教徒は、彼等が夢想憧憬する天國に其の一步を近づけたり。勝ちたる基督教徒は、更に無限の榮光に向つて其が翼を延べたりしにあらすや。され彼等よりそが信する神をのぞき去らむか、そこにはたゞ草を染めたる血潮と、裂けたる肉と、折れたる骨と、なまぐさき風とを残さむのみ。神の存在はげに意義ある活動の本体ならずや。靈のひゞきはげに吾人が生命の源泉ならずや。あゝ理想と憧れのために劍を佩きたる彼等のいかに勇ましきよ。靈的勝利を得んがために血と肉とを捧げたる彼等のいかに尊むべきよ。夫れ徒らにジュデヤと印度とアラビアと支那とを蔑むものは笑ふべきかな。ジュデヤは亡びたれども『山上の垂訓』なほ吾人の耳に響動を傳へて、神の子の愛はとこしへに吾人を征伏し得たるに非すや。印度の民、獸の如く無智なりと雖も、菩提樹蔭の曉星あざやかに眼を射て、吾人は吾人自らの胸を釋尊が大哲理の中に見出すにあらすや。ヘエラ山の深緑、マホメットに天地の大生命を賦與せしを思は、誰かアラビア遂に一瞥にだも値せずと云はむ。あゝ支那は老いに老いたり。然れども人倫の道柄乎として明かに、こゝに東洋の天地を照すもの、これ果して誰の靈ぞ。嗚呼吾人は遂に劍と血潮との争闘以外に、聖天靈野の契合にも似たらむ如き、一大心靈の征伏を希はざるを得ざるなり。劍を叫んで止まざるものよ、汝の云ふところ可ならざるにあらす。然れども其の兜に理想の白百

合をかざすを忘るゝ勿れ。ろが左の掌に經典を持し、馬上に靈の征伏を彈じて止まざる樂器を備ふるを忘るゝなかれ。

## 三

吾人は翻つて我がわかし帝國に就いて云ふところあらむかな。

仰いで見よ。青雲のむかぶすかなた、天使が征矢のまに／＼輝く默示の微光。伏して見よ、青春の希望と絶美の同情とをろなへて、茲に聖天子のかげに蘇り、亞細亞のひんがし、茫々たる蒼海の間に横はれる年わかき帝國。ひろかに落ちゆく夜の幕の影より窺へば、刻一刻、時劫の大圓柱にさざまれ行く歴史のかげ、あゝ其の中にはやがて曉天の空に新しき息吹きかへさむ天地と共に、我がわかし帝國の一大飛躍をしるすべく今や鑿の手は下されむとす。

吾人をしてすでに刻まれたるところのものに就いて熟視せしめよ。そは劍を佩き甲を被りて、猛く且つ勇ましくかの蠻國を討つゝの狀なり。天の巨工はろが炯々たる眼光を以て絶へず地上を睨めり、彼はわかし帝國の正義と同情とを見て、満足の微笑をもらしぬ。かくてろが光榮ある未來の運命を祝福しぬ。歴史は未だ一の汚點を見ず。さはれろが過去の刻みは浅かりき。見よ、ろの巨鑿は高く彼が右手にさゝげられ、靈光をうけて明皎々たり。今やそは時劫の大圓柱に巨大の痕跡を残すべく用意されつれど、彼はただいよく鋭く下界を望むのみ。腕は石の如く堅くして、いつ動くとしも見えず。あゝその鑿、一閃ひらめいて圓柱に下らむ時、ろはやがて若き帝國の最大光榮たらむ。げにこれ帝國の靈的活動を印して永劫に傳ふるものならずや。今にしてこの國この民ぞが靈の微光を示

さずんば、どこしなへにかの鑿の手は下されざらむなり。

醒めよ。天の鑿は高くあげられたるに非ずや。歴史の刻み、今や汝の光榮をしるさんとしてためらへるにあらずや。我をして今ひと度歴史の過去を見せしめよ。曾つてわかき帝國は、かの支那と戰つて果して何をかなせる。あゝそが揚言をして僞なきの揚言たらしめよ。曰く、朝鮮の獨立を保全すと、然れども其の靈的活動は果して何の狀ぞ。吾人は答ふるに物なきを悲まざる能はざるなり。あはれむべきかの老大國は、かくて形体の危きを買ひぬ、精神の死滅をさづかりぬ。彼は猛き北狄におのゝき、わかき帝國に屈し、而してもろくの國に眠れる豚として賤しめらるるにあらずや。意義なき劍に於ける争ひは蠻族よくこれを爲し得べけむも、正義と同情とを把持して靈的折伏をなすは、ひとり我のみと、かくてわかき帝國の民は自らを欺きたり。結果はたゞ蠻國との敵視のみ。そこに何等の教訓をか授けし、そこに何等の光明をか與へし。天は失望しぬ。かくてかの巨大なる鑿は依然として下されざるなり。

然れども帝國はなほ老いず、然り、どこしなへにわかざるべし。劍を把持して戰の野に其の凱歌を揚げむは其の易々たるどころ、さはれ何が故に其の左手にコーランを捧げざるや、何か故に軍馬に跨つて靈の征伐を歌はざるや、帝者の軍の進むところ、感激と威力とに値せずんば、民衆の血潮の價値、遂にそれ幾何ぞ。征伏の野、征伏の民、これに加ふるに劍の暴壓を以てせば、正しくこれ暗黒と悲惨とを彼等に與ふるものなり。あはれむべき亡國の民を附庸せずして、帝者の業と、わかき帝國の希望とを充たさんは、恰もこれ自ら彼の女を愛せずして、彼の女に愛せられんことを欲する

ものならずや。あゝ聖天子を頂ける青春の國、豈敢へて神聖純美なる靈の屈伏をなし得ざらんや。然れども天與の使命は多方面なる能はざるなり、春風秋霜兼ねるはる折攝二面の活動は、これを一大聖者に求むるに非ざれば、遂にのぞむべからざるところ、さあれ東海久しく麒麟を見ず、北方の彗星、將た又一人の偉人を下さず、日蓮再び絶東の國に出でざるを奈何せむ。

さらば吾人はかくて己むべきか。あらず。誰か燦爛たる寶玉を、うづまく黒潮のうちに投げて、わがき帝國の運命を呪はんとはする。雲はかけれり、星はささやけり、榮光はなほ吾人が望むにまかせたり。森の香は高し、鳥は歌へり、ニソフの泉なほことはの靈響を傳ふ。天それかくの如し、地はた然り。帝國今こゝに活力と向上との心だにあらば、惡魔よ來れ、山嶽よそびぬよ。そが頭は中天に血を曳いてとび、そが石土は碎けて大海の底に葬られむのみ。青春の希望、そが焰を消さぐらむ限りは、わがき帝國の意義は永遠の存在なるべきなり。

然らば吾人は其が希望を満足せしむべく必然いかなるものを要求すべきか、かくて本論は遂に最後の問題に逢着したるなり。

## 四

詩人をして立たしめよと、これ實に最後の問題ならずや。

道學の徒、遂に何等の權威に値せず、哲人の活靈とこしなへに寂びれゆいて、今はた人生に幽玄の星を見ず。人界の美しくしき攝理をなさんにも、偉なる宗教意識の人を得る能はず。あゝただ詩人は吾人が最後の願望を満足せしめ得べけむか。

るれ憧憬あるものは詩人にあらずや。かくて活きたる靈は鳩の如く彼の前に降り來らむなり。時代精神を我が胸に捉へて、新光明と、新生命とを煥發せしむるもの、これ實に詩人にあらずや。かくて彼が美しき愛郷の念は、劍と血と肉と物との爭奪以上に、更に生きたる靈の征伐を夢みつゝあるものなり。

げに詩人を有せざる國家は意義なきものならずや。そは直ちに國民の精神を具体表象すべき一大機能をも有せざるを明示すればなり。國先づ帝者の軍を出すとき、内に覺悟と理想とを有する詩人なくんば、其の國はとこしへに咀はるべきものならずや。そは直ちに血と物とを知つて靈の征伐を意味せざる軍なるを示せばなり。

われは茲に於てかの年わかき詩人ケオルネルを思はざるを得ざるなり。千八百十三年、祖國の山河に湧きかへる熱烈の愛を捧げつゝ、かの大魔王ナポレオン一世を誅せむがために、キエンの町を離れて終に國民軍に投じ、短き二十二年の人生を春夢の如く葬り去りたる崇美の人を見ずや。

みどり深き森林の露を受けて、地味ゆたかなるドイツランドの野、そこに生せる民の自由と活動とを軍中の詩卷『琴と劍』の中にうたひこめ、更に靈の活動を無限に發展したりし彼のいかばかり美しきよ。まさにやさしき戀人に別れ、なづかしきキエンの町を離れんとせしとき、

われをあやまること勿れ、詩に於ても、劍に於ても、わが奮進の行路と光明とは、つねに一なりすぎこし夢のわがあこがれ、あにそれあなならむや。しらす我が詩は常に國民と自由とに向つての唯一の奮進のためにさゝげたりしを。さらば我は行かむ、劍をもちて、さらば我は其の王冠を



得む。〔野の人の「詩人き」  
〔ヨルネル〕より〕

と歌ひけむ彼が心のいかに尊く勇ましきよ。げに筆をとるのみを以て、詩人の存在を肯定すべくんば、湧き湧く潮のごときろが活力は、いづくいかなる時に於てか實現の期を與へられむ。理想活躍の時に於て、偉大なる詩人の意義は、遂におのづから消滅し去るべきを奈何せむ。風さむき軍營に眠りては、祖國に無限の威力を賦與せんがために、常に神と愛とを夢み、さめては全軍の將卒にろが琴と歌との響をつたへて、まことの戰の意義を宣ぶる一人の詩人を有せむは、やがて全軍の靈的活動を宣言し、劔の光明を語るものに非ずや。

わがわかき帝國と。さらば醒めずや。さめての後に、わが大和民族の胸に秘めたる聲をうたひ、ろが意義と理想とを明らかにして一大活靈の征伐を試みる詩人をして立たしめずや。かくて國はとこしへにわかゝらむなり。民は劔を把つて靈のために戰はむなり。光と共に鳴らむ詩琴のひびきと、光明をのぞみて暗黒の帷帳をやぶる彼が劔とは、いちはやく征服し得たる民と地とを靈活せしむるなり。あゝ曉天の崇美と、落日の端嚴と、南方の野に鬱然として茂る深林の大觀とは、かくてぞ帝國のれもてに躍出すべけむなり。

時と運命とは、今やわがわかき帝國に、そが音なき啓示を下すらく。靈の戰をなせ、而して汝の春をして永遠にむかゝらしめよ。然らずんば汝の老は分秒にして至らむのみと。げに靈なき國家のいかに果敢なかりしよ。ポーランドの野と、朝鮮の半島と、あゝ誰か涙なきを得むや。然れ共、グリスはろが藝術の花影にかくれていかに若きぞや。ローマはそが鑿のひびきによりていかに永劫

に傳はるぞや。

今やわがわかし帝國は劍を把りて驚異を値しつゝあるにあらずや。然れども靈の影は未だ戰の野に下されず。春はすでに蘇りぬ、折攝兩面の大活動をなすべく、さらば劍に血ぬらしめよ。軍馬に跨る若き美しき詩人の面影に、鬱勃の力と靈戰の宣言とを仰がしめよ。

嗚呼天の巨工が捧げたる鑿は今や下らむとす。されども彼の眼になほ不安の影あるは何ぞや。未だわかし帝國が戰ひつゝある間に詩人の聲をきゝ得ざればなり。靈戰の宣言を認め得ざればなり。さらば詩人よ立て。汝が眞美なる生命を提げて健闘せよ。劍と靈との光明を投射せむに今の時を措いてうれいづくにありや。死したる冬草の原の眠りにあらずして、生きたる夏草の野の活動を現せんは、あゝかの大陸を措いていづくにかある。かくて天の巨工をしてゐが光れる鑿を下さしめ、天柱の一侧に一大歴史の影を残さしめよ。これ直ちに又汝の名と、汝の光榮とを表はすものならむ也。

(了)

